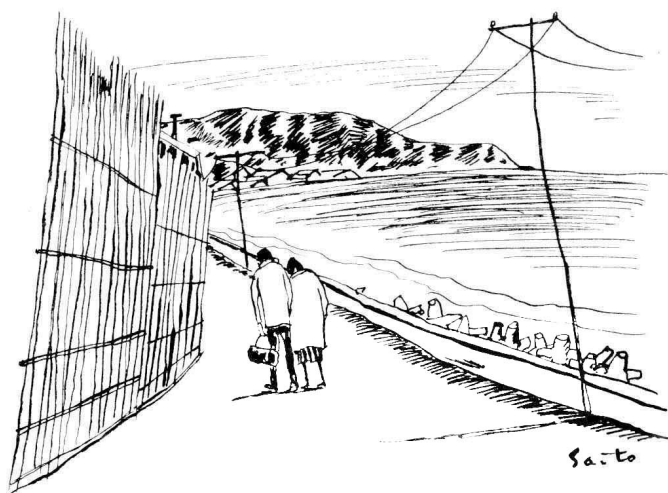


長い橋 水上勉 (上)



新潮社版

長い橋 (上) 水上 勉



新潮社版



© Tsutomu Minakami 1983 Printed in Japan

長い橋 (上巻)

昭和五十八年四月二十日 印刷
昭和五十八年四月二十五日 発行

定価 一、二〇〇円

著者 水上勉
みなかみ つとむ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六一五一
編集部(03)二六六一五四

郵便番号 一六二一

振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社光邦

製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-10-321116-4 C0093

目次

はぐれ鳥	家出論講	骨を抱く男	蟬が鳴く	痩せた男	二号観察対象者
265	208	156	103	52	5

装画・カット
斎藤真一

長い橋
(上巻)

二号観察対象者



六月に入つて、底冷える日がつづいた。しつこい風邪がなおらず、咳も出た。咽喉の奥に痰がからんで、息を吐いたあと、絹糸を爪でこするような音がする。頭も重かった。それで、いつもなら、六時には起き、店に出て表を掃いたり、ウインドウの硝子など拭くのが朝課だったが、いつまでも床にいたかった。わきの床で夫の仙吉はまだ深く眠っていた。しずかに、小用だけすませて、部屋へもどったが、床へ入るでもなく立ったまましていると、遠くでドカーンと一つ大きな太鼓をたたくような響きがあつて、窓ガラスがかすかにゆれた。地震かな、と思ったが、家はそうゆれもせず静かになった。一瞬突風が起きて、町内をゆさぶつて去った気がした。それで気にもせず少し床に入っていたのだ。あとで朝食の時に長男の基一が、

「浅間が爆発だつてさ」

といった。ニュースを見たらしかった。わきにいた長女の和子が、

「へえ、またア」

眼をまるくして、

「何時ごろよ」

ときいている。

「ついさっきだよ」

田村雪枝は、あの時刻だったか、とすぐそう思ったが、まさか、長野県の東北隅といつてもよい遠隔地の山が爆発したのに、岐阜県下のこの町まで、あんな音がして、硝子障子までふるわせるだろうか。大きなダンプだつてすつ飛ばしてくると、この町は道がわるいから地ひびきで大ゆれする。

「東京にも灰が降つたつて」

「へえ、そんならこつちだつて降つてもいいのにね」
と和子。

「馬鹿。こつちは山がいくつもへだたつてゐるんだぜ。東京は、平野だから」

「平野だから、灰がゆくの」

「こつちが降らなきやそうだら」

夫はもう食事をすませて居間にいなかった。店へ出て、卸部の宮前徹に今日一日の配達先を指示している様子だった。薬剤師の今田みやこは、薬局の方で掃除の音をさせていた。頭が重たかったから、それに、遠い山の爆発といったこともあって、鈍痛の消えないこめかみの内側で何か事が起りそうな気がしたのは妙だった。食事を終え、部屋へもどつて、夫がぬぎ放しにしているシャツと下着を洗濯機へはこぼうとしていたら、みやこが廊下から、奥さん電話です、と告げた。小机の時計を何げなく見ると、九時少し前だった。廊下の電話へ行つた。

「奥さんかね」

崇福寺からだつた。愚堂和尚の声だとすぐわかつた。

「朝早く電話で何じゃがなも、このあいだの鰯村あじむらさんの話の二号観察対象者のことじゃがなも

……」

眼を被^{おお}つていたうす幕のようなものがぴりつと音をたてて破けた。

「おぼえています。あざみ寮へおいでなさる方で……十七歳とかの」

七日前だった。やはり風邪気で頭が重かったが、保護司仲間やケースワーカーの連絡会があった、愚堂和尚と会った際、その娘のことはきいていたのだ。だが、名前はおもいだせない。和尚はいった。

「もう少し山の方でやってもらえるかと思うとたんじゃが、急な観察処分の判定でなも」

山とは錦山にある少年院のことである。未成年女子も収容されていた。

「わしは何とか会うたで、だいたいのことはわかつとるが、やつぱりこれは、あんたじゃないとあかん思えてね。鰻村さんのいいなはるのも当然でなも」

雪枝は、こういう物の言い方で、大事なことを押しつける愚堂のくせに馴れていた。

「みなさまのご指示ですなら、よろこんで担当させてもらいますが……でも、わたしにだって重荷すぎやしませんかなも」

いつになく弱気になっている自分がわかった。逃げたい思いからではなかった。大まかな非行歴はきいてもいた。尋常でない娘だった。十七で不純異性交遊どころか、街娼までやっていたという。和尚は咳きこみながら、

「あんたがやってくれんと……ほかに誰があろかのし。若いひとではちよつと手古ずるのはわかつとるでなも」

和尚も風邪らしかった。咳が受話器をゆさぶるほど大きかった。

いつものことだ。雪枝のあつかうたいがいの対象者は、崇福寺をとおして指示があった。市の更生保護事業では最古参で、地区部長でもあった。県の委員もやっている。鰻村というのは、保護観察所の観察官で、仮釈放刑余者の保護観察を担当している。和尚の形容をかりれば、大物観

察官だった。雪枝などは名をきいただけでも身ぶるいするぐらいの殺人犯で、無期懲役囚だったのが、十七、八年矯正施設にいて、恩赦や、仮釈放で出てくる。重刑余者とよばれる人たちがあつた。これらを簀村輝三は担当した。実務派で、切れ者だが、頭が低くて、足まめに対象者の帰住地をこつこつ訪ね歩くのが評判だ。彼の言動が研修会では噂にならぬ日はなかった。雪枝たちの講師でもある。担当したむずかしい仮釈放者の更生保護体験を、とつとつと、低い声ではなす時は、くちびるをつき出すようにする。少し不健康そうな青白いとがつた顎も雪枝には印象ぶかつた。

「簀村さんがおつしやいますなら……おひきうけしないわけにまいりません。でも、いつものことですが、和尚さんにはだけはいろと教えていただかないと……」

「わしに何が出来るかなも。わしや男じゃでなも……女ごの対象者は苦手なんじゃ。それに、坊主じゃから、女の人たちといった心性については、さっぱり一年生でなも。いまだに、うちの家内や娘の法子のいいよることがわからんのやから。時どき別世界の人間がいうとるような気のすることがあつてなも」

和尚は咳きこみながらわらつた。

雪枝は、わらう笹本愚堂のうしろで、細君のいつ子と、娘の法子が、崇福寺の庫裡のうす暗い茶の間で、卓子^{アッセル}をへだてて耳たてている姿を思ひうかべた。雪枝はよく崇福寺の庫裡の電話機のある部屋で、女たちだけの時間をすごすことがあつた。

「そうでしょうかね。和尚さんが女性通でないなんて、ほんとにできませんがなも」

愚堂の咳がひどくて、耳につけている塩化ビニール製の受話器につたわつてふるえる気がした。「まだ、おなおりになりませんのね」

自分も、けさから頭が重くて困っている、とは言えなかつた。

笹本愚堂は、雪枝たち二区の保護司仲間には、いつもこの調子で、対象者を委託する。冗談もまじえた物言い、大事なことを託するのである。愚堂は、雪枝が担当しているふたりの保護観察対象者の様子も熟知している。もっともこのふたりは、愚堂と観察所の鰺村が相談できめたもので、ひとりには赤井さとみだが、市内の美容院で働いて、その寮に起居している。もう一人は林田かの子で、これは笠松矯正施設で七年の刑を終えて、仮釈放となり、更生保護会から斡旋してもらった、長良の既製服工場の縫い子をしている。ふたりとも更生実績はあがり、月一どの向うからの来訪も約束どおり欠かしたことがない。雪枝にも、窮屈に思える遵守事項を守りとおしてゆるぎがなかった。いわば手のかからぬ対象者である。愚堂は、この成果も雪枝の真摯な保護があつてのことだとひとめながらも、他の女性保護司たちの対象者と比較しながら、慎重に新しい対象者を向けてくる経過を、雪枝も承知していた。だから、愚堂が咳きこみながら、そのことを言外にこめ、

「店のしごと忙しかろうがなも。ひとつあんだでないと、どもならん娘さんじゃでのし……」
と、

「鰺村さんは、午前中は会議がありなさって、ひるからあざみ寮の方でみなさんと会おういうてなさるでなも。二時ごろにあんた来て呉れんかえ」

いくらか横柄な物言いにかわった。これも和尚のくせだ。

「承知いたしました。和尚さんのお言いつけですもの……万障くりあわせないとお叱りうけますわ。いつも、申しあげますように、わたしは当方では、邪魔者です……。店の方は、放つておいてよろしいんですから」

という、

「頼みましたぞな。観察所の方へはわしから電話しとくで、あんたは何もいわんできておくれな。」

ほな、向うで、鰻村さんと……」

話がすむと、一方的に電話を切るのはいつものことで、頭痛の耳もとへ、受話器を大きく置く音がたたくようにひびいた。

居間へもどると夫の仙吉が、卓子に肘をついて、茶を吞んでいた。基一も和子も二階へあがって、いない。つけっぱなしのテレビは、朝の茶の間むけのニュースをまじえてやたらとコマシヤルの多い番組だった。

「浅間山が中噴火やそうな」

夫はいった。

「さつき基一からきました。ひどいんですってね」

「土、日じゃなくて、人は少なくてよかったそうだが、昨日なら、怪我人も出たいうとる……火柱が五十メートルもあがって、熱い灰が山をながれてきたそう。九年ぶりいうとるが、山も十年に一べんは怒るのかなも」

暢気なことをいっておれるのも、はなれた岐阜県下に住んでおればこそだと、夫はいいたそう
で、

「頭のかげんはどうだ」

「すつきりしないんです。宮前さんからもらった粉ぐすりを吞んだんですけどいくらか痰が切れただけで。でもわたしは観察所へゆかねばなりません……」

雪枝は、いつものことだが、留守しますが、と小さくいった。

「和尚さんからか」

「そうです。いつかのあの娘です。二号観察の……」

夫は新聞から眼をはなして雪枝を見あげた。

「あの娘あざみ寮へ入るそうです。いろいろ問題もある娘ですから、どうしても担当してくれつて和尚さんがききません。もう勝手に決めとられて……」

「いいじゃないか」

夫は、お前の仕事だ、と言外にそれをこめて、

「いつておいでよ、やりかけたからには……やらにや」

そのとおりだった。やりかけたからには、頭が少し重くたつてやらねばならない。

「そうですね」

茶棚へよつて、自分の湯呑をもつてきて、卓上のきゆうすへジャーの湯をそそぎ、二、三どきゆうすを左右に振つてから、湯呑へ入れた。

「十七で、不純異性交遊や売春はひどいですよね」

声が少し大きすぎないかと、夫は二階へ氣をつかった。

「山にいたのかね」

「一年の徹底教育で、どうやら、保護会の方へあずけてよい処分が出たそうです。十七で……たいそうな男行脚あんぎゃくですつて。かないませんね」

そりや、おれだつてかなわんよ、と眼をまるくした夫は、新聞をたたみ、

「どこの娘さんか。県下か」

「生れは、能登やそうです」

「能登……へえ」

夫は眼を大きくひらいた。

「くわしいことは、わからないんですけど。こないだの集まりに、鰺村さんから話が出て、寺山さんたちの担当してらっしゃる対象者のひどい話も出たあとでしょ。鰺村さんが今日の浅間山や

ないですけど、少女非行の小噴火が小学六年、中噴火が中学卒ごろ、大噴火が高校三年生ですって……そんなこといつて、能登の娘さんのことをはなしなさんですよ」

「高校の娘さんかね」

「いいえ、十七だから、中学だけでしょ。登校拒否つづけて、外泊、それから異性交遊、それから家出のケースです」

「シンナーはぬきかね」

と夫はわらった。

「シンナーのことはきませんでしたけど」

「どっちにしても、パターンは一しよのようだな。どうなることかね。ことしは少女非行の多発地帯やね、この町は」

「崇福寺さんもおつしやいます。男の刑余者はさっぱりしてて保護もやりやすいけど、女ごはいやや。女ごがこんなにあふえるなら、法務省へたのみこんで女性保護司を倍增してもらわんといいん……」

「そのとおりだよ。お前が一人で、三人もだから」

「しかたありません。やりかけたことですから」

雪枝は立ちあがると、

「和子には、こんどの娘さんのことはあなたまだ話さないでくださいね。あたしがゆつくりあとではなしますから」

夫はうなずいて、雪枝が呑みのこした湯呑をずらせると、一気に呑んで立ち上り、

「今日は、わしも伊吹までいつてくる」といった。

「もぐさですか」

雪枝はきいた。すると、

「まむしや。えらく早くに出よった。ことしは当り年になるかもしれない。おかしいで。山の爆発する年まわりは、まむしも早く眼をさまして出てくるのかなも。きのうの朝、新道の建設現場でハツパをかけたら何十匹も出てきて工夫が捕獲したいうて、長浜から電話があつて……」

意外な出物で頬をやわらげる夫が、雪枝の気分をいくらか晴れさせた。夫は、卸売りもする漢方問屋を自負している。もぐさも、まむしも、伊吹山の産物だった。数年前の春に、一ど夫と土地の業者に案内されて、セメント工場のある麓の、もぐさの野生する狩野をドライブした。もぐさのある土地は、角だった小石原で、夫は、石の穴にはまむしがいて、もぐさとりの主婦たちは副業に捕獲して、本職のもぐさよりも収入になると説明した。どんごろすの袋に入れて送られてくるまむしを、宮前にかぞえさせて、富山の一心堂へ送らせると、黒焼きにして送るかえしてくる。

雪枝は、一時すぎに薬剤師の店番をする薬局部の方から表へ出た。卸部は左手のドアを境に別棟になっているが、漢方部の売店もかねている。むかし車庫だったところを改造して、うしろへ土間をつけ足し、奥ゆきのふかい殺風景な三和土の半分を店に、半分は貯蔵棚にしていた。夜はそこへ、ライトバンを入れて、シャッターをおろしている。いま、そこにライトバンはなかった。宮前をつれて、夫は伊吹へまむし買いに走ったのである。

雪枝は外へ出た時のくせで、薬局部のカウンターの今田に会釈したあと、卸部の男店員の坂上勇が、こっちに気づかずうつむいて何かしているのをたしかめてから、日傘をばきりと音だててひらいた。そして、バス停の方へ歩きだした。

あざみ寮は、金華山とよんでいる戦国時代の領主が城をきずいた山の中腹台地にある。市が公有地の一部を伐りはらってやがてそこに福祉関係のセンターを建築する予定である一角に、曹洞宗関係の僧侶たちが、篤志家の遺産から、資金をもらって、刑余者の宿泊施設をかねる寮を、建てたのである。五年前だった。雪枝がまだ保護司になって一年目のことで、この寮が出来たことで市の更生保護事業は活発になって更生保護会も越してきた。大小の会議室も出来、研修会も時そこでやる。月に三、四どは出かけてゆく先になったが、この日は、まばゆいぐらいの快晴の空で、陽のカケラが、つきささるようで、めまいを感じた。雪枝は早目に出たので、ゆつくり歩いた。はじめてあう対象者だった。前から話にもぼって、手ごたえもありそうなその娘との対面だというのでいくらか気が重くもある。間のわるいことだ。二日ほど話があとなら、清々した気分で会えたものを、と雪枝は店のくすりをいくらかえ呑んでも、いっこうになおらない、ぐずついた気管支のあたりのぜいぜい音のするのに腹がたつた。しかし、熱はひいていた。二、三日、家の中にこもっていたので、外へ出ただけで気は晴れた。

寮へゆくには、麓の瑞龍寺ずいりやうじよこのバス停から十五分ぐらい坂道をのぼらねばならない。崇福寺は、そのバス停から十分の東麓とうろくにあるが、愚堂和尚も、その頃はもう時間を見はからって、徒歩で山へ入るころだった。さいきん雪枝たち仲間にも、ジョギングやるよりは、バスを目的地の二停留所早めに捨てて歩くのが流行していた。健康法にそれがいちばんかなうのだと友達はいったいま、目ざしてゆくあざみ寮もそれに適する距離だった。

この日が六月八日だったとはつきりおぼえているのは、夫がまむしの大量捕獲の報が入ってよろこんで伊吹へ出かけたのと、浅間山の中噴火があつたせいだろう。少女非行のありようを鰐村観察官が説明するのに山の噴火になぞらえたのが、いつまでも頭にあり、それが、その日、偶然ながら、大噴火といつてもいいくらいの問題非行少女とはじめての顔あわせだったせいもある。